

新刊紹介

地学ハンドブックシリーズ

7 「貝化石のしらべかた」

— 絵あわせで名前をきめよう —

磯貝文男・柴田松太郎・真野勝友編著

8 「生痕化石調査法」

— 古生物の生活を探る —

大森昌衛編

地学団体研究会生痕化石研究グループ著

学団体研究会, 各145ページ, 1,000円

地学団体研究会から, 上記2冊が相次いで刊行されました。これらは初心者・アマチュアの方を対象に, 貝化石・生痕化石の名前の決定や古環境解析の初歩をやさしく解説した本ですが, 貝や生痕化石は専門外という野外地質研究者にとっても十分実用的な内容を持っています。

「貝化石のしらべかた」は, 絵あわせで貝化石の名前を決めるというテーマで構成されています。このような方法は, 分類形質を押さえながら系統的にすすめる本格的な手法と比べると厳密さに欠けると思われるかもしれませんが, 逆に言えば誰にでも直感的にできる利点があります。その点で, 地学や化石に初めて興味を持った人が, 実際にそのものに触れながら知識を深める際の入門書として適しています。詳しい系統関係は, 名前を決めた後で図鑑で調べるとよいわけですね。

章ごとの内容は, 次のようになっています。I章は本書のねらいについて, II章ではこの本で行う絵あわせのやり方を練習問題で説明してあります。III章は貝の基本型や各部の名称など名前を決めるのに必要な事柄の解説です。IV章では化石の採集や整理についての要領や注意点をあげ, V章で貝化石を用いた古環境解析の方法を, 例をとってわかりやすく説明しています。VI章は貝類の分類と解剖についての解説です。VII章は参考書の紹介, VIII章では貝類の和名索引と学名や生息環境のデータを表にまとめてあります。IX章は用語解説。最後に絵あわせを行うためのスケッチ図集があり, 現生種が多く含まれる更新世の二枚貝と巻貝, 計188種のスケッチが収録されています。

本書は系統分類にとらわれず, まず名前を決めようというユニークな構成をとっているため, 専門的な知識がほとんどなくても化石に対する興味を抱か

せてくれることでしょう。また, 貝化石を使った古環境解析法の解説なども, 例を用いてわかりやすく解説してあります。この中でふれてある, サンゴやコケムシなど貝の表面に付着した生物からも情報を得ようとする試みは従来あまり着目されなかったものですが, 今後発展する可能性があり, おもしろい発想です。ただ, 絵あわせには自ずと限界があるので, 絶滅種の多い化石群集を扱う際の手だてがもう少し詳しく説明されていると良かったのでは, と思います。

「生痕化石調査法」は, 生痕化石を専門に扱った入門書, あるいはマニュアルとして初めての書といえます。本書もまた, 初学者に対してわかりやすく書かれています。

全体の構成は, 次の通りです。I章で生痕化石の定義と種類を, II章でその大まかな分類について, III章では記載と命名に関する注意点について各々述べてあります。IV章は個々の生痕の特徴とそれを作る生物に関する解説です。V章は生痕化石の調査法を, 研究例の紹介と実際に野外で観察するときの道具や要領の説明とに分けて解説しています。VI章は生痕化石と古環境との関係についての解説で, 生痕を用いた古環境解析の指針となるものです。

この本により, 生痕化石の扱いづらいという印象が拭い去られ, 関心の高まることが期待されます。V章では干潟における現生の生痕の観察に関してページを割いており, 生痕は生物の生態そのものの記録であることを改めて認識させられます。本書は生態と環境, それらと地質現象との関りを, 化石や干潟の観察を通すことによって豊かな自然現象の一部として理解するための助けとなることでしょう。

調査方法の解説の中で, 生痕の記録方法として立体写真を紹介してありますが, その例があまり多く掲載されていないことは残念です。複雑な構造を持つ巣穴の石膏模型などの立体写真があれば, その形を容易に理解できるはずですね。

両書とも図が豊富で視覚的にわかりやすく, またB6版と小さく軽装なので野外で使用するにも好都合です。上に述べたように誰にでも利用できるように工夫されていますから, 今度の休日は両書を持って化石採集にでかけてみてはいかがでしょうか。

(地質部 兼子 尚知)